優秀賞

# 柿の葉心

今野　芳彦　　秋田県にかほ市　　六十六歳

縁側に腰かけて庭を眺める、親父が育ててきた柿の枝に張りが見えない。

毎年剪定してくれる主の姿が見えず、枝切りをする若造に不信感を抱いたのだろうか、今年は実の数も少なければ、鮮やかな色もなく、これは柿の木の抵抗かも知れない。

果樹に関して全くの素人で、伸び放題の枝を見かねて整えただけの事だ。

入院している親父は自分の手足の自由が利かず、食事から排泄まで、全てが他人の手に委ねる不甲斐なさからか、顔から感情が失せ、それを見ているのが辛い。

持ってきた柿の葉を親父の指に絡ませ、感触を思い出してもらい、鼻先へ持っていって香を思い出してもらう。

「柿の木、元気が無くてなあ」目も耳も確りしているはず、確りしていてほしい、そう願いながら話しかける。

顔の皺が少し崩れ、分かってくれたのか、僅かに口が開き、その開き具合から「センテイミス」と読み取り、「そうか、千手観音みたいにあっちこっちへ伸ばした枝を切り過ぎたか、新芽だった観音様の手をもいだら拙いよなあ」と笑う。

部屋に漂う柿の葉の香りは、親と子の心を繋いでくれた。

来年はたわわに実った柿の木を親父に見てもらいたい、果樹栽培の本を開き、俺も頑張るけど、頼むぞ、と柿の幹を撫でてやる。